

「耐震」の潮流 インタビュー

日本建築構造技術者協会(JSCA)の新会長に就任した。東日本大震災を受けて建築物の安全性に対する意識や関心が高まる中、「被害を検証し、建築の耐震安全性を考へることが専門家の役割だ。震災の教訓をこれからの設計に生かしていかないといけない」と力を込める。構造設計者が対応するべき課題は山積しているが、全国の会員とともに難局を乗り越えていく考えだ。

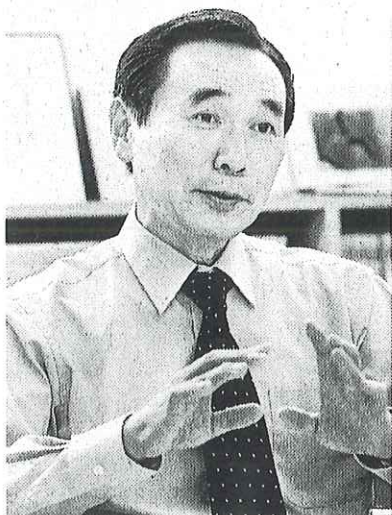
—1面参照

—就任の抱負を。り上げていきたい」

「構造設計の事務所を持ち、日々の業務を行っている中で会長の重責が務まるのか不安もあったが、現役という立場だからとSCAとしてどう向き合うかという会員の思いもあり、引きかたということ。今までの地

で仕事をしているので、そこつた機会を使って地方の会員と交流していきたくて、今回の津波被害や、二次部材、仕上げ材などの被害も目立つ。学術団体や研究会の皆さんの協力を被害調査の報告書の中から考え、実行していきたい。一部の人々が引張るので、有用な情報を見だし、的確に把握して受け止める。被

日本建築構造技術者協会会長 金箱 温春氏



災から何を学び、専門家として何を発信していくかをきつんと考えていきたい」
—社会との対話とは。「構造設計者と社会との関わりを緊密にする。JSCAでは10年前、クライアに建物の安全性を説明するツールを作成したが、やや専門的過ぎたため普及していない。そこで一般の人が分かるように内容を見直し、設計時に建築主や意匠設計者に渡せるような説明文のリーフレットを作成する。社会との接点となる日々の設計活動の中で各設計者がこのツールを活用して何を発信していくかをきつんと考えていきたい」
—構造設計者と社会との関わりを緊密にする。JSCAでは10年前、クライアに建物の安全性を説明するツールを作成したが、やや専門的過ぎたため普及していない。そこで一般の人が分かるように内容を見直し、設計時に建築主や意匠設計者に渡せるような説明文のリーフレットを作成する。社会との接点となる日々の設計活動の中で各設計者がこのツールを活用して何を発信していくかをきつんと考えていきたい」

被災の教訓、設計に生かす

今こそ社会との対話が重要

どを考えるのが性能設計だ。一般の人の構造への関心が高まっており、今こそ構造設計者は対話をしていかないといけない。性能設計について理解を得られやすい状況にあり、建築基本法の議論にもつながっていくだろう」
—職能の魅力、活力をどう高める。「構造設計者が活力を持ち、若者があこがれるような職能になるよう活動していきたい。私自身、JSCAの会員になっていろいろな人に出会い、さまざまなことを学び、切磋琢磨(せっさたくま)してきた。そういうことを若い世代に継承し、構造設計者の思いを全国に広げることがJSCAの役割だ」

「新しい技術を学ぶ研修のよつな受動型と、自ら参加し動く能動型の会員活動を両輪でやっていく。能動型の活動として昨年から構造デザイン発表会を始めただ。一般の人の構造への関心が高まったので、今年地方からの参加者を増やしたい。いくつかの支部ではミニ発表会を計画している。全国的なイベントにしていきたい」
—支部の活動が活発化している。「現在、地方で会員が増えており、支部や県単位での活動が中心になっている。職能を社会に定着・浸透させるには、本部だけでなく、地域の会員が支部や県単位で集まって身近なところから自発的に活動することが重要だし、そういう時期に来ている」。

(かねばい・よしほ◎)
53年長野県生まれ。75年東工大工学部建築学科卒、77年同大学院総合理工学研究所社会開発工学専攻修了。77、92年横山建築構造設計事務所、92年金箱構造設計事務所設立。東工大特任教授。JSCA賞、日本免震構造協会賞、松井源吾賞、日本建築学会作品選奨など受賞歴多数。